

第九章 わたしたちを誘惑に遭わせないでください

偉大なる魂の師が弟子に語った。

「あなたは、完全にけものとなることなくして、あなたのうちに棲むけものとたわむれることはできない」

「あなたは、真理への帰依を失うことなくして、偽りをもてあそぶことはできない」

「あなたは、自らの魂の優しさを傷つけることなくして、残忍で冷酷な競技に興じることはできない」

「もしあなたが、庭をきれいにしておきたいと思うなら、あなたは雑草の繁る余地を残しておかないはずである」

主の祈りに込められた嘆願は徐々に強まり、「わたしたちを誘惑に遭わせないでください！」というこの苦痛の叫びで頂点に達する。父にこの嘆願を唱える背後には、人間の、自らに對す

る苦い認識が前提されている。すなわち人間はもろく、弱い存在であり、自らの希望を裏切る結果となるにもかかわらず、つい誘惑に負けてしまう存在であり、神に不忠実になり、実際に誘惑に身を任せ、その結果、信仰を失ってしまう存在であるということである。この苦痛に満ちた魂の叫び、その根本にある意味をつかむために、われわれは、人間の条件の成り立ちを知らなければならない。この条件とはすなわち誘惑が入り込み人間の墮落が生じた際の事情である。

人間——誘惑（試練）に遭う存在

人間の生は、基本的に二つの方向を合わせ持っていて、一方は地上を志向し、他方は天上を志向している。われわれは地上に生きているがために、地上の宿命から逃れることはできない。もろさ、傷つきやすさ、あらゆる面で限界を持ち、そしてついには死ななければならない。聖書は、地上におけるわれわれの生は肉における生であり、「肉の思ひは死である」(ロマ八6)と語っている⁽¹⁰⁾。このことは、しかし、地上における生命が無力で無意味であることを意味するものではない。ここ数世紀の歴史を見ても分かる通り、自然や社会を改変する人間の能力

には驚嘆すべきものがある。科学、技術の発達は、生態系の破壊にもかかわらず、人類の大多数に対し、相対的に快適な生活と、住むに適した環境を提供してきた。

しかし、最終的な分析の結果、われわれは古代の賢者が発した問い「人間が太陽の下で心の苦しみに耐え、労苦してみても何になろう」(コヘ二22)を問わねばならない。われわれが何を行なおうと、何を成し遂げようと、すべてに有限の刻印が押されている。われわれは、全てを引き受けることが出来ないでそれを行うことも出来ないし、全てになるということも出来ない。一言で言うなら、不世出の天才であろうと、最も過激な革命家であろうと、あるいは最も献身的な抗議を行う者であろうと、飲み、食べなければならぬし、休息し、いくばくかの睡眠をとらなければならない。

他方、さまざまに制限を受けたこの同じ人間も、その願望と衝動をじっくり考えるならば、星となることができる。彼は、瑣末な事柄に身を委ねることに満足しない。彼はすべての障害を突破し、つねに、自分の限界を超えようとしている。これは意志の問題ではない。これはむしろ天与の衝動といえるものである。人間はこの衝動によって、無限への飢え、絶対への渴きを持つ。シラ書に結論されているとおりである。「人が究め尽くしたと思ったときは、まだ始まったばかりであり、途中でやめてしまうと、徒勞に終る」(シラ一八七)。(10) 聖書は、存在のこの様相を「靈の生」と呼んでいる。人間存在はその完全な状態にあっては、上方へのよびかけ

を感知し、完全なる自由、究極の完全性を求め、永遠の休息所を得たいと思うのである。「命を与えるのは『霊』である」(ヨハ六63)、そして「霊の思いは命と平和であります」(ロマ八6)。

肉における生と霊における生の結びつきで、人間性が客観的実体として成立しているわけであるが、この二つの生は決して調和のとれた状態で存在しているわけではなく、むしろ人間を両者の間で引き裂く役割を果たしている。存在論的というなら、人間はバランスを保とうにもそれを許されない存在、ということが出来る。われわれは、限られた枠の中に押しこめられていながら、無限の大きさを持つ存在であり、この地上にしっかりと固定されていながら、輝く星にも届く存在である。この不均衡を統合するものは何なのであろうか？ この不協和音はどのようなにしたらシンフォニーとなって鳴り響くのであろうか？パウロが確信して語ることは真に迫っている。「肉の望むところは、霊に反し、霊の望むところは、肉に反するからです。肉と霊とが対立しあっているのです、あなたがたは、自分のしたいと思うことができないのです」(ガラ五17)。このことはすべて、われわれが「人間」と呼ぶ現実の中に見出されることである。

また、この二つの存在論的状态は、生に対する二つのアプローチをも形成する。生は決して「与えられる」ものではないし、既成事実でもない。それは築き導かれていかなければならな

いものである。ある者の生のあり方は、肉の次元に基盤をおいて築かれる。彼らは、世界が与えてくれるものを受けて満足し、霊によって促されるどのようなことからも抑圧してしまふ。パウロは、こうした選択をしないようにと注意を促している。なぜならこの道は、神の国に通じる道ではないからである（ガラ五21）。この心の傾向が具体的に現われると「姦淫、わいせつ、好色、偶像礼拝、魔術、敵意、争い、そねみ、怒り、利己心、不和、仲間争い、ねたみ、泥酔、酒宴その他のたぐいのもの」（ガラ五19-20）のような行いになる。

しかしわれわれは、漠然として具体性のない話には満足しないものである。ゆえに「肉の思い」が現代社会での歴史の上にあらわれているのを見てみよう。現代の社会機構では、往々にして、ごく一部の者の手に富が集まり、ほかの大多数の人間は損害を受け、貧しさと空腹を余儀なくされるのである。国々を支配している社会システムは、はなはだしく不公平であり、構造的な不正義が蔓延し、社会的罪悪がはびこるところとなった。プエブラ会議はこの不正義、悪を預言的に非難している（「プエブラ」五〇九、五六二）。このシステムのもとたず誘惑と幻想が全ての人の心に根をおろせば、利己主義、無感動、同胞に対する暴行へと全ての人が絶え間なく誘われることになる。こうした態度、生き方は、「命」と対立するものである。そしてその行き着く先は、「死」である。

しかし、人間の生を霊の領域へと向け、進ませることもまた、可能なことである。（肉の生

をも含めた）あらゆる生は、神の目から、そしてすべての人間の関与する運命の観点から、いっそうはつきり見ることができると。この「霊の思い」は、ガラテヤの信徒への手紙五章22節に述べられている「愛、喜び、平和、寛容、親切、善意、誠実、柔和、節制」（ガラ五22）という形をとる。「霊の思い」は生命を解放する。その結果、生命は開花するのである。そして聖書は私たちに約束している。「あなたは命を選び、あなたもあなたの子孫も命を得るように」（申三〇19）と。

その上、われわれの時代にこの考えを歴史の舞台に登場させることが重要である。可能ならぎり多くの人々のために、彼らが人生の全ての段階で共同と参加の生活が出来るように、その建設と育成に関わっている人は全て、霊の計画を実現する過程にある。彼らのめざす社会において始めて、幻想ではない真実の状態、すなわちパウロがわれわれに示した「霊の果実」が現実になる。

人間の置かれた条件が危機に満ちているのは、これまでに述べた二つの生き方が、混ざり合っているからである。霊の思いを選んで生きようとする者は、自分の内部で苦しみもがく肉の思いに対して戦わなければならない。『内なる人』としては神の律法を喜んでいますが、わたしの五体にはもう一つの法則があつて、心の法則と戦い、わたしを、五体のうちにある罪の法則のとりこにしているのが分かります。わたしは何と惨めな人間なのでしょう。死に定められ

たこの体から、だれがわたしを救ってくれることでしょうか」(ロマ七22〜24)。(102)

それを強め維持するために、この「靈の思い」は、苦しみや試練に会わなければならない。これは、まさに、両方とも、「靈の思い」という基本的な選択に忠実な概念を表わしている。この試練は、もちろん苦痛、苦難に満ちているわけであるが、それと同時に、深い意味をも含んでいる。すなわちこの試練は、先の基本的な選択を承認し、強化し、純化するのである。ユデイトは敵将ホロフェルネスの暗殺に向かう前に、人びとに素晴らしい演説をおこなうが、その中で、この主題について典拠の一種となった陳述をおこなうのである。「これらすべてにまして、神なる主に感謝いたしましょう。主は、わたしたちの先祖になさったように、今わたしたちに試練を与えておられるのです。主がアブラハムに対してどんな仕打ちをなさったか、イサクにどのような試練を与えられたか、また、……ヤコブにどういうことが起きたかを思い起こしてください。主は彼らの心を試すために火のような試練を与えられましたが、わたしたちの場合も同じで、決して報復ということではなく、主に近づくこととする者を教え諭すために鞭打たれるのです」(ユデイ八25〜27)。

ここで見られるように、試練とは、われわれが神に誠実であろうとするために支払う代価のことなのである。試練の真の働きは、決して罰ではなく、魂の浄化である(一ペト一6〜7)。時には嘆願の対象とさえなる。「主よ、わたしを調べ、試み、はらわたと心を火をもって試し

てください」(詩二六2、また詩一三九23参照)。他の個所においては、試練ゆえに神に感謝が捧げられている。「神よ、あなたは我らを試みられた。銀を火で練るように我らを試された」(詩六六10、さらにイザ四八10、シラ四四20参照)。ヤコブの手紙の一節は、各種の試練を「この上ない(純粹な)喜び」(ヤコ二2)と見なすようにと求めている。試練は、善き人をさらに善くするために、幾度もわれわれの生の行く手に姿を現してくる。

こうした人類学的考察をなぜ述べなければならないかというと、主の祈りの中のこの嘆願の主題となっている「誘惑」(試練)について深く理解するために必要なのである。われわれは、誘惑によって教化される(それではあまりに皮相的というものである)だけでなく、もっと突き詰めて、そのより構造的な面にまで迫っていかなければならない。その面に迫ることによって始めて、誘惑というものが人間性のどこに根差しているか知ることができる。こうした認識をもつことなしに、われわれはイエスの受けた誘惑の何たるかも、そしてわれわれ一人一人の生の前に用意されている誘惑の意味も、的確に把握することは望めないであろう。

人間とは構造上、誘惑に陥りやすい存在である。霊の導きにすなおに従う一面を持つと同時に、肉の誘いにも容易に乗ってしまう構造を持っている。人間はまた、感情に支配される存在ともみなされる。しかし、感情それ自体は悪いものではない。それによってのみわれわれは、自分の内にあふれんばかりに霊と肉の人が躍動しているのを知ることができる。正確に言うな

ら、悪は誘惑を受けることにあるのではなく、それに屈するところにある。われわれは神に対して、誘惑そのものを取り除いてほしいと願うのではなく、誘惑に直面した時、われわれを守ってくださいとすぐるのである。

人間の本性——脆さ・はかなさ

人間の最大の不幸は、それがかつて誘惑に負け、また、負け続け、現在もなお誘惑に陥り続けていることである。「試練」は、何らかの運命の別れ目のように（それは本来「浄化」「純化」の意味をもつことばであった）発展・向上の機会であることをやめ、失敗や挫折の場合に用いられるようになっていく。罪は神の愛、隣人の愛、世界の愛を否定する。そのことによつて、すべての人間の歴史を悲劇的に遮断してしまう。そして人間の罪の深さに気付くほどに、この悲劇がいつそう恐ろしいもの、身震いするものとして見えてくる。第二バチカン公会議は次のような声明を公にしている。「人間はひとりでは、悪の攻勢に首尾よく立ち向かうことができないことを知っている。その結果だれもがあたかも鎖で縛られたかのような心理状態に陥っている」（「現代世界憲章」一三項）。

巨大な否定が歴史をおおい、犠牲者を生み出している。すなわちこの世に出現したすべての人がそのいけにえとなっている。われわれの救済に関するかぎり、われわれは汚染された状況の中に生み出されたのである。われわれは、個人の罪と制度化された罪の蔓延する歴史状況によって、貧血状態にさせられている。それらはますますわれわれが、飛び石となって存在するわずかな逃げ道をたどることも不可能にさせ、われわれ自身の在り方にそむき、これを否定する誘惑に従わせている。

「正義」とは元来、人間にそなわる肉と霊の力の全てを、われわれの人生がそこに集中させられていくわれわれの父である神、そしてわれわれの兄弟姉妹である他者、さらにはわれわれが地上の善きものを自由に管理するよう委ねられた世界といったものの全体を統合する力、その能力を意味することばであった。しかし罪によってそれらの拠りどころは揺るがされ、その結果、それらの力もそれぞれの方向に向かい、飛び去り、われわれの人間としての統一も分裂している。⁽¹⁰³⁾

人間は、どのように罪を犯せるのであろうか？ なぜ真実にそむけるのであろうか？ なぜ同じ社会に生きる人びとにつらく当たることができるのであろうか？ なぜ愛に背を向けることができるのであろうか？ 神は人間存在をもっと別のものにつくれたのではなかったか？ 神は罪という悲劇を完全に免れることは出来ない。なぜなら罪は神によってつくられたもので

はないが、神のゆるしのもとに生じたのであるから。

神が全能の存在であることは論を俟たないが、神は、罪の生起を妨げはしない。それを黙って許している。疑いもなく、われわれは神が罪の存在を許しているのを知っている。なぜなら神は、悪からいかにしてさらに高度の善を引き出すかを知っているからである。しかし、聖アウグスティヌスがいかに「祝福された罪」について多くを語ろうとも、われわれにはこの「さらに高度な善」に関する啓示は与えられていない！ われわれは、この神の愛のはからいが栄光とともに現われるのを熱心に待ち望むのである（ロマ八18参照）。神学は、この点を理解するために、この「不正・罪惡の神秘」に光を当てようと試みている。

罪が存在するためには、罪の可能性が前もって存在しなければならぬ。そしてこの可能性は、まさに創造の神秘そのものと結びついている。⁽¹⁰⁴⁾ 創造について、そして被造物について語ることは、依存について語ることである。あらゆる被造物は、存在するにあたっても、生を維持するにあたっても、神に依存している。それは神からのものであり、神によって作られ、神のために存在する。神の完全さに比べれば、被造物はすべて不完全な存在である。この不完全性は、われわれが抗議し、あるいは消滅を求める悪い物ではない。真実はまさに、この世界は神、あるいは神そのものから発出した分身（すなわち子なる神）ではないということである。それは神とは別れていて、異なり、有限であり、依存している存在なのである。ゆえにそれが

存在する究極の理由は、それ自体にあるのではなく、それに意味を与える「何ものか」を求めるところにある。これが客観的な状況であり、被造物の構造の客観的説明なのである。

人間の場合、神は完全であり、被造物は不完全であるとの認識がある。至高で無限の実在（神）は、偶発的で、有限である実在（そのすべての創造物を含んだ世界）と位相を異にした存在であるわけであるが、人間の魂は、両者の中間に置かれ、両方からとらえられる存在となっている。その事実を知る人間は、必然的に不安を抱き、苦しみを味わうことになる。そしてこの不安、苦しみはいかなる医薬、療法によっても癒されることはない。これらは、人間の存在論的構造を構成し、また創造と関わりをもつ時、その尊厳を表出する。人類だけが他の有限な存在より上に立つことを許され、また無限な存在と対話を交わす能力を与えられた。人間だけが有限なものと無限なものとの中間に立っている。人間は、この世界に属してはいるものの、この世界だけの存在ではない。かといって、神の像、似姿を与えられているといわれながらも、神だけの存在でもない。神と世界の間に「宙吊りにされて」いるのである。この二つの領域にまたがって存在するという事実が、苦しみを引き起こしている。なぜなら二つの世界が一人の人間の全体を（この世の）肉と（神の）霊に、完全と不完全に、断ち切るからである。

この不完全性はそれ自体では全く無垢であり、何か大きな問題の原因となるわけではない。しかしこの不完全性は、試練や、誘惑や、罪の可能性を構成する。創られた存在であると同時

に、創造性をそなえた人間は、この不完全性や有限性を、受け入れ難いものと思い、さらに、もっともなことから、神のようになりたいと願った（創三五）。しかし神とはどのような存在なのであるのか？ 神は、それ自身で存在するもの、存在する無限の善と愛の実体である。

神は、己れが真正の神であることを他の何ものにも証明してもらう必要がない。神は真理であり、善であり、最高存在である。これにひきかえ人間は自らを、永遠に神に従属する被造物であると知っている。人間は自らの力で、あるいは自分たちだけで、存在しているわけではない。人間の究極の存在理由は人間自身にあるのではなく、神のもとにある。神のようになりたいという求めは、不可能で、所詮かなわぬ望みである。われわれはつねに、創られた存在であり続けるので、神のようになることは決してできないのである。

自らにそなわった有限性を受け入れたくないといい、肉に取り囲まれた霊の苦しみを拒否するのは罪である。それゆえに罪はつねに、そのまま受け入れなければならない被造物の意味に反抗する不敬の行為なのである。これは、傲慢、不遜（ギリシャ悲劇の「ヒュプリス」）の態度であり、まさに僭越の絶頂である。これは真正正銘の悪であり、歴史的罪であり、自由の乱用の結果である。この罪は、あらゆる人間社会に蓄積されてきており、世界の罪となっている。それはすでに人間の内部、そのライフスタイルに組み込まれたメカニズムを生み出し、現代の男女の第二の本性といってよいものになっている。

かくて人間社会は、悪い意味で「情動的である」。それは、悪を企て、悪へと誘う。これを聖ヤコブがよく表現している。「神は悪の誘惑を受けるような方ではなく、また、御自分でも人を誘惑したりなさらないからです。むしろ、人はそれぞれ、自分自身の欲望に引かれ、唆そそされて、誘惑に陥るのです」(ヤコブ13-14)。具体的に言えば、われわれひとりひとりには、利他主義や現実参加、そして共同体への呼びかけだけでなく、利己主義や復讐、死の本能への傾向もまた、存在する。それゆえにわれわれは、正しさと同時に、罪深さを感じ、抑圧を感じると同時に、解放を感じるのである。われわれ人間はこの悲劇的状況から脱け出すことができるであろうか？ パウロは、「死に定められたこの体から、だれがわたしを救ってくれるのでしょうか」(ロマ7:24)と問う。そして安心して答えるのである。「神だけが、主イエス・キリストを通して(わたしを救ってくださいます)。神に感謝します」(同7:25)。次に何故こうしたことが起こったのかを考えてみたい。

イエスが試みを受けたので、誘惑に遭う人間を救うことができる

イエスが誘惑を受けたことは聖書の証言から明らかである(マコ13、マタ4:3、二六41、

ルカ二二28)。

「この大祭司は……あらゆる点において、わたしたちと同様に試練に遭われたのです」(ヘブ四15)。イエスはご自身が試練を受けて苦しんだからこそ、現在試練を受けている人たちを助けることができるのである(同二18)。われわれは、イエスの遭われた誘惑について、われわれの理解してきたことを明らかにしておく必要がある。この誘惑は、人間イエスに直接インパクトを与えたと思われるし、間接的にも彼の神性を揺さぶらずにはいなかったはずである。なぜなら誘惑に遇ったイエスの中の人間性は、神ご自身の人間性であったからである。イエスの内には受肉された神が存在していたが、そういう存在として、彼は、神の属性をはぎ取られ、代わりに人間としての限界を受け入れていた。これは、受肉の神秘の重要な特徴である。神の御子は抽象的な形をとらず、ナザレのイエスという、歴史的で具体的な姿をとられたのである。

ナザレのイエスの人間性は、この歴史的枠組みの外に求めることはできない。イエスがまとった人間性は罪の歴史に特色づけられている。つまりその人間性のすべてが神の目的によって定められたのではない。パウロは力をこめて語る。「(神は)御子を罪深い肉と同じ姿でこの世に送り」出された(ロマ八3)。ヨハネはもっと端的に「言は肉となった」(ヨハ一14)と述べている。すなわちイエスは、われわれの墮落した反抗の状態にある暗やみの世界へと入ってこられたのである。

イエスは真に人間であつたので、以上明らかにしてきたような肯定的な意味での情動の状態を分かち持っていた。この情動の状態には、人間の肉の思い、そして霊の思いがある。彼はその時なお、巡礼者で、終末的段階に達していなかった。「自分自身も弱さを身にまといている」だからである（ヘブ五2）。あらゆる旅人のように、彼は歴史の境界、陰影の領域で生きた。すべてのことが彼にとって透明で見通せるものであつたのではない。イエスは信仰と希望に働きの場を持っていたのである（前掲一二2-3）。もし彼が完璧な存在として作られていたのなら、この成果は未だ、得られなかったことであろう。彼は、父に絶対的に従属する存在として生き、父の意志に忠実に従つて生きた。しかし、この父の意志は明らかにされるに際して、ゆつくりと示されねばならなかつた。イエスは自分が、神によつて遣わされた解放者であることを知っていたが、その解放の過程の全体において、全ての段階が完全に透明であつたのではない。

父は御子に、どの段階を受けとるよう求められたのであろうか？ イエスは自身の使命を果たす限りにおいて、神の国は政治の力、あるいは聖なる儀式の力、またカリスマ性、奇跡の手段によつても成し遂げられるものではないことを明確に理解していた。彼の取るべき道は、苦難の僕の道、すべての罪人の罪を贖うために自分自身を捨てる義人の道なのであつた。

イエスが試みられた誘惑を、悪や罪への誘いと理解すべきではない。彼はつねに、その生を

父に集中させて生きていたので、そのような誘惑は歴史的に考えられない。イエスへの「誘惑」は神の意志を歴史のある部分に行なおうとする具体的ステップを絶えず忠実に求めることにあった。すなわちイエスは数々の問題を解決しなければならず、人々の欺きやごまかし、つまりファリサイ派や、弟子たちのそれにつきあい、そしてイエスを中傷し、迫害することにまで達する誤解の数々と対決しなければならなかった。⁽¹⁰⁵⁾ この意味において、イエスは誘惑され——試みられ——「キリストは……激しい叫び声をあげ、涙を流しながら……祈りと願いをささげ」られた（前掲五七）。ゲツセマネの園で、彼は、苦しみもだえながら、切なる祈りをささげられた（ルカ二二44）。ヘブライ人への手紙には、非常に真に迫った記述がなされている。「キリストは御子であるにもかかわらず、多くの苦しみによって従順を学ばれました」（ヘブ五8）。従順はすべて、厄介でわずらわしいものである。イエスはこの責任、厄介ごとによって試され、そして勝利した。それゆえに彼は、彼のあとに続く人びとの模範としての自らの役割を果たすことができたのである。

福音書には、イエスがこの世にある間終始一貫して、誘惑や悪の体現者であるサタンに対抗し続けた様子が描写されている。⁽¹⁰⁶⁾ メシアはことあるごとに悪魔を打ち負かし、被造物のすべてに解放をもたらした。イエスはバプテスマを受けるために登場した直後、砂漠にある敵の陣営に連れて行かれ、そこで誘惑者に試みられることになる（マコ一13、マタ四3）。悪魔は追い

たてられたが、(イエスの)時に注意をよせていて(マタ八29)、自らの好機を待っているのがあった(ルカ四13)。イエスは悪魔に休む暇を与えず、出会う時はいつも彼を追い払った。病において追い払い、ファリサイ派の無情さにおいて追い払った。しかしサタンは、麦の間に毒麦をまき(マタ一三25、39)、ユダの心の中に入り込む(ルカ二二3、ヨハ一三2、27)有害かつ敵意に満ちた存在である。彼はまた、シモン・ペテロそのほかの使徒たちを小麦のように「ふるいにかけて」ようとした(ルカ二二31)。イエスご自身は弟子たちに、自分が試練に遭う時、一緒にとどまって欲しいと頼んだ(前掲二二28)。サタンの攻撃はゲツセマネの園での苦しみの間じゅう行なわれ、その時イエスは弟子たちをいましめて言った。「誘惑に陥らないように祈りなさい」(前掲二二40)。サタンの全勢力が十字架上で発揮され、イエスはほとんど絶望に陥るところまで追いつめられる。そこでイエスは叫ぶのである。「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」(マコ一五34)。しかしイエスは悪魔ではなく、御父に自らの霊をゆだねることにより、サタンを打ち破ったのである(ルカ二三46)。

イエスへの誘惑は、そのように、彼の生涯のつかの間の出来事といったものではなく、彼の生の歴史を通じて終始つきまとう「暗い影」であった。神の国は、悪の王国の対極に築かれるのであり、その悪は決して怠惰に打ち過ごしてはいるのではなくその不正・邪悪の存在を知らしめる。イエスはその肉において(ロマ八3)誘惑に遭うことにより、罪の歴史全体に勝利したの

であり、苦難の手の届かない「安全な」ところに居たわけではない。誘惑を自らの肉に引き受けて、罪に打ち勝ったのである。イエスの偉大さは、誘惑のないところに見出されるのではなく、すべての誘惑に打ち勝ったその力の中に見出されるのである。

主よ、わたしたちを大きな誘惑から救ってください！

人類、ならびに個々の人間はすべて、誘惑、悪の誘いにさらされ続けてきた。この状態は、人間の歴史がまさに始まって以来の真理であって(創三)、その終りの時まで続くことである(黙三10)。われわれはキリストと彼に従う人びとの共同体に堅くつき従うとき、世界の罪による激しい攻勢から守られ、愛する御子の支配する王国に移される(コロ13、また、エフェ612、ガラ14も参照)。他方、われわれが生きる限り、戦いは続いてゆく。われわれは「悪魔にすきを与えてはならない」(エフェ四27)のである。

やがて、最後の対決、決戦の時、この世の終末の時がやってくる。⁽¹⁰⁷⁾これは、「全世界に來ようとしている試練の時」(黙三10)でもある。イエスのことばでは、「不法がはびこるので、多くの人の愛が冷える」(マタ二四12)。「偽メシアや偽預言者が現れて、大きなしるしや不思議

な業を行い」(前掲二四24、マコ一三22)、多くの人を惑わす。偽る者たちは、キリストのしるしや聖なる事物とともに現れるので、みな惑わされるのである。もし正しい者に対する神のあわれみがなければ、「だれ一人救われない」(マタ二四22)。あらゆる誘惑の根は、キリストと彼の国に対して忠実でないことである。おそろしい背信の危険や最後の変節がはびこる(二ペト二9)。

こうした文脈のもとで、われわれは「わたしたちを誘惑に遭わせないでください!」という主の弟子たちの憂慮の祈りを聞くのである。しかしこの思い患いは、神の国を来たらせ神の意志を完成するためにすでに父なる神のもとにおられる方の平静さの中に吸い込まれている。われわれはすでに、イエス・キリストを通じて、神の勝利をはっきり知っている。われわれは、「勇気を出しなさい。わたしはすでに世に勝っている」(ヨハ一六33)というイエスのことばを聞いている。そして、「わたしがお願いするのは、彼らを世から取り去ることではなく、悪い者から守ってくださることです」(前掲一七15)というイエスの祈りに答えがあらうことを知っている。とはいいいながらも、なお警戒が必要であり(マコ一三23)最後まで耐え忍ぶことが求められる。それが果された時にのみ、われわれは救われるのである(前掲一三13)。

この祈りの部分には、普遍的な終末論的次元が含まれているが、それと同時に、人間ひとりひとりの人格的な次元も含まれている。われわれは死ぬと、審きを受ける。それは神の国へ入

るための完全な浄化の可能性とともに、われわれの実存に関わる最も根源的な危機が噴出する時である。ここにおいて最も深遠にして究極の判定が活動を始める。すなわち人間としての生におけるわれわれのあらゆる決断の結果が判定されることになる。われわれの希望は風前の灯となる恐れがあるし、神に信頼してゆだねる気持も、弱くなる可能性がある。疑惑や絶望の影が、われわれの心の中にかげりを作るかもしれない。人生の意味の暗さが、われわれと無限の善である父なる神との間に黒雲を吹き込み、神の国に対するわれわれの確信を揺るがせ、人間を救うという神の意志に疑いを投げかける可能性がある。そんな時、われわれはこの嘆願を唱えなければならない。「わたしたちを誘惑に遭わせないでください!」。